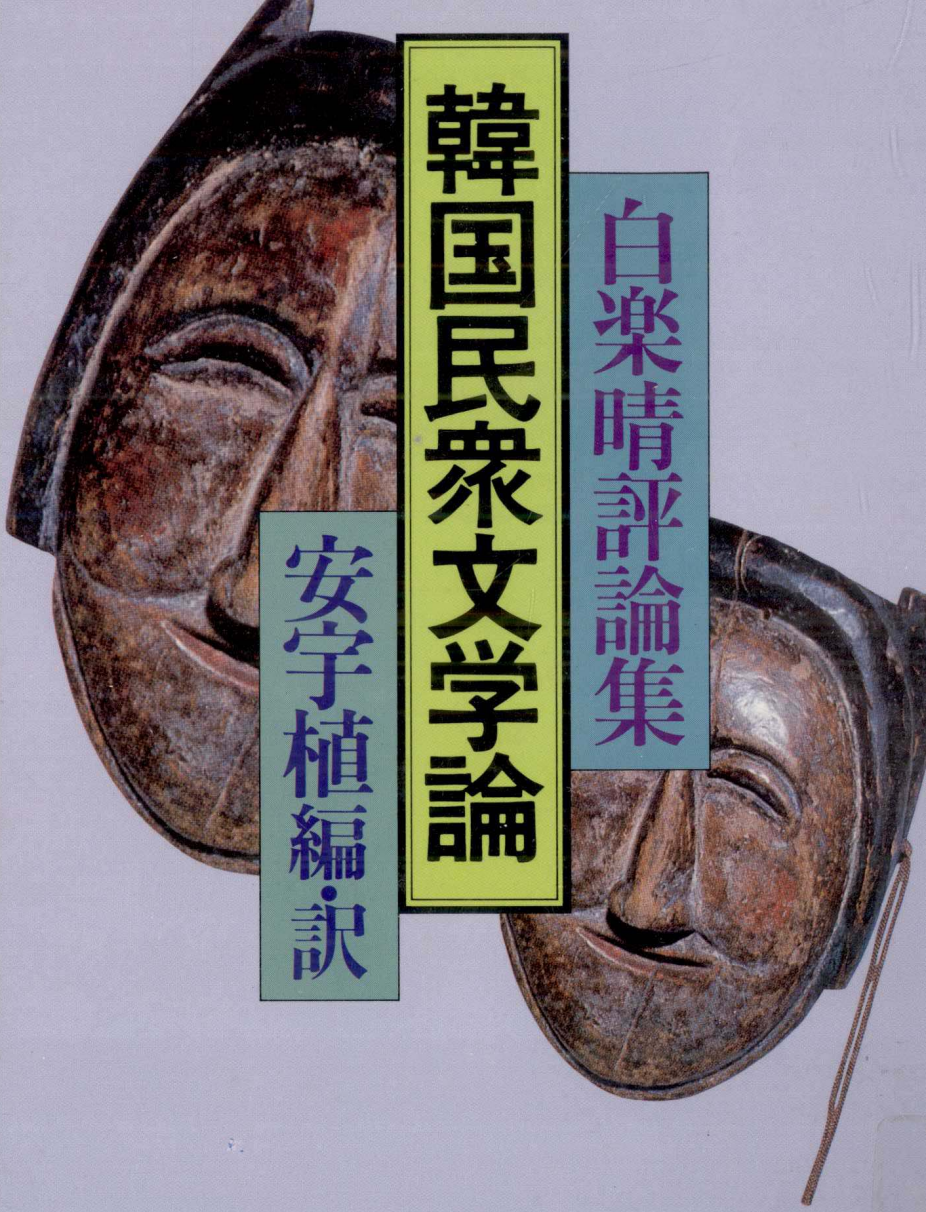

# 韓国民衆文学論

## 白楽晴評論集

安宇植編・訳

三一書房

# 白楽晴評論集

# 韓国民衆文学論

安宇植編・訳

三一書房

韓国民衆文学論

1982年10月31日　第1版第1刷発行

編・訳　安　宇　植

© 1982年

発行者　菊地喜三次

印刷所　岩村田活版所

製本所　山本製本所

発行所　株式会社　三一書房

東京都千代田区神田駿河台2の9
電話 03 (291) 3131～5番
振替 東京 9－84160番
郵便番号 101

落丁・乱丁本はおとりかえいたします。　Printed in Japan

# 目

# 次

## Ⅰ　民族文学・第三世界論


韓国文学と市民意識……7
民族文学の概念定立のために……14
民族文学の現段階……36
第三世界と民衆文学……96
ヨーロッパ文学研究と第三世界論……154
英文学研究における主体性の問題……165


## Ⅱ　民主化・人間解放


待つことの真の意味……181
芸術の民主化と人間回復への道……198




此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

民族の現実と人権思想……211
民衆とはだれか……227
四・一九の歴史的意義と現在性……249
解説……273

# I

# 民族文学・第三世界論

# 韓国文学と市民意識

## 帝国主義時代の市民意識

市民革命の完遂がわが社会の当面する課題として残されている限り、われわれの文学にとっても切実に求められるのが市民意識である。しかし、かくいうときの市民意識は、西洋史における「市民階級」、すなわち「ブルジョワジー」の階級意識とは明瞭に区別されねばならない。韓国のように植民地時代を経ており、いまだにその傷痕を完全には清算できずにいる社会では、反封建的市民革命が何よりも反植民地主義的な性格を帯びざるを得ないのに比べ、西欧ブルジョワジーの階級意識はまさに帝国主義時代をリードしてきた意識だからである。だとしたら現存するヨーロッパ市民階級の意識を批判し克服することこそ、われわれ自身の正しい市民意識を形成するうえで必要不可欠の作業となる。

もとより、ヨーロッパ市民階級の歴史を振り返ってみると、われわれが学ぶべき点が少なからずある。とりわけ一八世紀末葉の二大市民革命といえるアメリカの独立革命とフランス革命において、市民階級が示した先進的な歴史意識と主体的な実践精神は、こんにちにいたるも世界史的発展の活力となっており、「市民意識」という言葉がいまだに失なってはいないアピールする力の大部分も、彼ら

市民の輝かしい業績に由来しているのである。しかし、フランス革命が最初のスローガンとは異なり、一つの民族国家、一つの階級中心の社会体制に落ちついてゆくにともない、彼らの意識には重大な変質が生じた。歴史を発展させるための困難な闘いに各個人の持てるものを捧げるという市民精神から、すでに実を結んだ発展の果実を自分たちだけで独り占めしようという打算へ、全人類が自らの理性にもとづき自主的に発展できるという寛容なる信頼感から、自分たちより市民革命に遅れた国は植民地となり、自分たちの「保護」と「指導」を受けてしかるべきだという偽善的な帝国主義と人種主義へと発展することになったのがそれである。このような変化は西欧ブルジョワジーの内部でも次第により多くの人びとを政治的決断と平等な経済行為から疎外し、目前の日常的な現実や自己満足にふけらせたり、あるいは枝葉末節の不満を吐露させることでがんじ搦めにされている小市民意識の膨張をもたらしたのである。

一言でいってこんにちの西欧市民階級の意識とは、本来の意味におけるそれというよりは、自分の国のことに関する市民的責任を忘れ去った小市民意識と、他人の国のことに恐れげもなくくちばしをはさもうとする帝国主義意識の奇妙な混合物といえる。このような決定的な事実を抜きにした市民意識論は、まことに危険きわまりないものである。それによって消費者保護運動や迷信打破運動など、それなりに意味のある断片的な動きを生みだすことはできるが、われわれの当面する課題である反帝国主義・反封建主義的市民革命、三・一運動と四・一九を通じて部分的には闘い取ったものの、依然としてその完成のためにわれわれすべての努力が要求される韓国的市民革命を成就することはできぬからである。いや、それとは正反対に、このような革命を妨げる小市民意識に落ち入ることによって、



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

知らず知らずのうちに帝国主義時代の延命に奉仕することになるのである。

## 文学における小市民意識

市民革命が未完の課題として残されているこんにち、文学においても小市民意識が大いに幅を利かせているだろうことは容易に推察されるところである。もとより数年前のように小市民意識なるものを公々然と擁護し、礼讃する言葉は、近ごろでは耳にしがたくなっている。しかし、まことの市民意識の勝利が市民革命の完遂によってのみ可能である以上、そこにいたるまでは小市民意識とその自己弁護とがどんな形態をとるにせよ持続されるものである。

例えば芸術作品では、市民意識と小市民意識とを問わず、あらゆる「芸術以外」の要素は二次的な関心事となるよりほかにないという主張も、実際のところは市民意識の確立を妨げ、小市民意識にくみする主張となる。それが芸術以外の問題には厳正中立であり、ただ芸術本来の任務に忠実なだけだといった考えは、その場合の前提となる「芸術」の概念自体が西欧的小市民意識の一つの表現として台頭してきた事実を知らぬところからきた考えである。いわんや、西欧的小市民意識がとりもなおさず西欧的帝国主義思想の別の一面であることを想い起こすとき、このような芸術観がわれわれの社会に要求される市民意識や市民文学からどれほど縁遠いものかを知ることができる。

とはいえ、文学の「現実参与（アンガジュマン）」を主張すればただちに小市民意識が克服されるわけでもない。問題の核心はあくまでも、われわれの現実における反帝・反封建的要求をどれほど深く意識し、どれほど力強く実践しているかにある。したがって「市民的参与」を標榜する文学といえども、現存する西欧市民階級の意識状態を本質的に超えることがない限り、皮相な告発文学として抑圧的統治の介添役を

つとめるか、圧制の口実をさらに提供する程度に終わりかねない。

「民族文学」の概念もまた、それがまことに市民革命・民族革命の要求と合致しないときは、小市民のもう一つの文学的表現に転落することになる。民族文学のスローガンまで「小市民意識」と結びつけることは、にわかには合点がいかぬかもしれない。国粋主義や復古主義への転落を懸念してのことであればいざ知らず、これにおいても「小市民意識」をことあげするのは、悪いことはすべて「小市民的」だとするゴリ押しではあるまいか。しかし実際には、国粋主義や復古主着が近代以前の、小市民以前の民族の現実と民族文化への回帰を意味するというより小市民的現実の定着に依存するものであり、ときにはその現実を定着させるための積極的な道具として使われているところに、こんにちの一部の民族文学論議における真の危険性がある。それは、例えば前近代的な民族の実態の一部である「両班気質（ヤンバンかたぎ）」をこんにちまともにつらぬこうとしたら、むしろ小市民以前の両班として忠実に留まっていてはならず、醸造場の経営と子孫の海外留学からはじまり、政権や外国企業への協力をふくむ一連の「近代的」形態が要求されるという、われわれの周囲の常識を通じても検証される現象である。誤れる民族文学論がまさに小市民意識・植民地意識の表現になりうるという理論も、ここにおいて成立するのである。

このように、こんにちいうところの先進工業社会と植民地、あるいは半植民地的後進社会が一つの世界史にくくられている状況のもとでは、従来のあらゆる概念をもってしては予期しえなかった化学変化が生じている。「市民意識」なる言葉をはじめとするすべての聞こえのよい単語が、まったくとんでもない作用を及ぼしうるようになったのである。このような混乱を避けうる絶対的観念の領域は

存在しない。ひとえに全世界を通じて、封建的圧制と帝国主義的収奪を終息させるための実践的努力の中へ飛び込んで行くことによって、さらにまたそのような努力をともにする多くの人びとの実質的な必要性という判別基準を自己のものとすることによって、新たな確実性を闘い取ることができるのである。

## 市民文学と農民文学

このような歴史的な課題に照らしてこんにちの市民文学がもつ問題点を再検討したとき、一種の逆説的現象がうかがわれる。すなわち、われわれが求める「市民意識」は、しばしば都市よりも農村においてより強烈に現われ、われわれが期待する「市民文学」がたびたび農村文学の形をとって現われていることである。これは、すでに述べたすべての概念の化学変化現象を考え合わせないならば、「逆説的」というよりもたんなる「矛盾」であり、市民文学の概念を無理やり適用させたものというべきであろう。しかし、帝国主義の時代には都市と農村の区別もやはり、それまでとはまったく異なる性格を帯びることになる。そもそも、西欧市民革命当時のロンドンやパリは汎民族的・民衆的エネルギーの集結地として、そのエネルギーを革命的意識に昇華させる役割を果していたのに比べ、いわゆる後進国の都市は、その国の民衆の意識と精力を集約させるというよりも、まったく馴染みの薄い社会の意識と精力とによる作用を民衆に伝達する、媒体の役割を果すのである。このような歴史的状況のもとで、農村はたんなる都市の反歴史的機能から免除されたという理由からだけではなく、そうした機能の直接的な被害者として、その害毒を誰よりも正確に意識しうる立場にある。そこから切実な民衆的体験にもとづく農民文学の、「市民文学的」意義が生じるのである。

これを敢えて「市民文学」の名で呼ぶのは、一つの方便といえなくもない。とにかく農村の現実を通じて都市の現実のある根本的な歴史的性格を捉える文学のみが、「素材主義」や復古主義に流れて小市民的現実の強化に奉仕するあまたの農村詩・農村小説と区別される本物の農民文学であることを強調する方便が、何かしらあってしかるべきであろう。金廷漢（キムジョンハン）の作品の世界にも見られるように、こうした農民文学は都市を舞台とする文学にただちにつながっていき（「人間団地」「地獄変」など）、農村生活の哀歓を受動的に受け入れる小説よりはむしろ、農民がまったく登場しない黄晳暎（ファンソンギョン）の「客地」や「韓氏年代記」などの作品と同列に置いてみる必要があるのである。

したがってわれわれは、「都市文学」もしくは「農村文学」といった既成の概念に囚われるよりも、当面する課題である市民革命の実質的な必要性に応じて、ある与えられた作品の市民意識を推し量らねばならない。都市に暮らすか、農村に生きるかよりも、都市では何をし、農村では何をするかが大切なのである。とはいえ小市民的挫折と堕落の現場としての都市からは決然と立ち去らねばならないが、市民的覚醒と実践の現場として都市と農村のどちらがより大切であるかは、ひとえに具体的な実践の過程を通じてのみそのつど決定されるものである。ゆえにわれわれの世代の卓れた詩人は、次のように都市との「訣別」を唱うのである。

こうべを垂れ
ぼくのみすぼらしい影法師に別れを告げ
眼を挙げていまではもはや見知らぬ所

村と林とまっ赤な大地に　涙でもって口づけする。
全身を投げうって闘わねばならぬ大地の
あの　さらけだされた苦痛の数々を抱きしめる。
狂おしい叛逆の胸いっぱいにかき抱かれる　故郷よ
濃い、濃い土の香よ　胸いっぱいに（中略）
固く固くかき抱こう　すこやかにあれと
丈高きポプラの樹の走る一筋の
まばゆい黄土の道をたどって　揺らぐ木陰に沿って
遠ざかってゆく都市よ
ご機嫌よう　ご機嫌よう

（金芝河（キムジハ）「訣別」の終章）

都市とのこうした訣別が安らかな都落ちを用意してくれるものでないことは、あまりにも明瞭である。市民文学のための努力は都市と農村のどちらにも安住しえぬ苦しみをともなうと同時に、そのいずれの土地であれ、高価な努力の基盤となしうる正当性を備えているのである。

『読書新聞』（一九七四年一〇月六日付）所載　**（訳＝河辺也寸彦）**

# 民族文学の概念定立のために

## 文学の「国籍」が意味するもの

民族文化と民族文学に関する論議はいまや一大ブームをなしている。一時は誰かが「民族文学」を論じるだけでも、すこぶる殺伐たる雰囲気が渦をまいたりしたものであったが、いまではすっかり形勢は変わってしまった。莫大な国家予算を支出してまで人びとを集め、民族文学を語り、ときにはその輝かしい開花を予想したりするありさまである。

民族文学の概念は決して放棄しえぬものと信じる筆者としては、まずはうれしく安堵の吐息すら洩らしかねぬところだが、これが果して民族文学の正しい展開と結実とを約束する現象であるのかどうか、にわかに確認することは難しい。ともあれこのような時期であればあるほど、民族文学とは何かという問いをもう一度提起してみる必要があると感じる。民族文学論が攻撃と警戒の対象であった時期よりも、それが一種の流行となったいまこそ、これに対する反論をいまさらのごとく噛みしめ、そうした反論を十分に乗り越えうるだけの根拠を踏まえてわれわれの民族文学論を定立させ、そうした根拠を欠いた民族文学論は民族文学に対する否定論に劣らず警戒すべきだと考えるのである。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com